

介護予防の英語表記に関する私見

A personal opinion on how best to express 'Kaigo Yobou' (frailty prevention) in the English language and Western culture

田中喜代次

緒言

誰もが日常的に使用する「介護予防」なる表現に違和感を覚えている筆者の私見を述べ、「介護予防」（介護＝護りの介入）の意味や解釈について、高齢者のケアリングを専門とする読者とも情報交換・協議していきたい。

コンセンサスを得た言葉「介護予防」

日本では「介護予防」（本来の意味は「要介護化の防止」かも？）なる言葉を知らない国民が皆無に近いほど、老若男女を問わず、広く浸透している。国、都道府県、市区町村などの担当職員は、厚生労働省介護予防事業や厚生労働省介護予防マニュアルといった言葉を日常の会話で使っている。大学の医学医療系や体育系の研究分野では、この「介護予防」を論文のタイトルの一部として使用するケースが多く、学生本人も指導的立場の教授も全く違和感を覚えていないのであろう。

要介護化抑制 vs 介護予防

「介護予防」は、要介護化（要介護状態になること）を抑制（防止）するための取り組みを指しているように思う。欧米では、successful aging や active aging, healthy aging, productive aging など人生を前向きに捉える語彙が多用され、日本人が使う「介護予防」に匹敵する英語（下記の care prevention など）を、英語圏の研究者が綴っている実態

を目にしたことは記憶にない。欧米人が使う「介護予防」に近い語彙表現は disability prevention や prevention of frailty, prevention of daily dysfunction などであろう。つまり、介護予防は支援（サービス）を受ける側（高齢者や障がい者）が介護を受けたくないと言回しに、あるいは遠慮して使用することには納得できるが、サービスを提供する側（行政や研究者）が使用するのとは奇異と言える。高齢化・長寿化が進行する昨今、介護は質的により充実化されて行くべき事象であり、防止すべき事象は日常の生活機能障害のはずである。

介護予防の英語表記

学会発表等で日本人は、「介護予防」を care prevention や care prevention service と表記しているのを見ることがある。日本国内で市販されている英語辞書の中には care prevention, preventive care, nursing prevention などの語彙が記載されている。これらの表記は、英語圏の専門家から見ると意味不明であり、的を射ないどころか、むしろ誤解を招きうることから、使用を避けるべきである。Care は help する側の主体性を示す言葉なので、care prevention と表記すれば、help を行なわないという意味になり、真意が伝わらないのである。認知症（ボケ）防止は dementia prevention または prevention of dementia と表

現できるが、care prevention と書くと「介護しない」または「介護することをやめる」という滑稽な解釈になってしまうからである。Preventive care のみでは意味をなさないが、preventive care for XX のように for の後ろに目的語を入れた場合には、意図が通じると想われる。辞書に頼るだけでなく、一つの語彙が持つ本来の意味や補遺と補遺の組み合わせによって生まれる概念について熟考しなければならない。

Prevention of Care vs Prevention of Frailty

PubMed で "long-term care prevention" (長期にわたるケアの防止) を検索すると、19 件ヒットした。そのうち 17 件が日本の論文であった。残りの 2 件はオランダとドイツの論文だが、どちらも介護予防を示す意味で使われた表現ではない。

<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/?term=%22long-term+care+prevention%22>

日本の厚生労働省は、介護予防の英語として、preventing long-term care や long-term care prevention を用いている。具体的には、介護予防訪問介護、介護予防訪問入浴介護、介護予防訪問看護、介護予防訪問リハビリテーションなどの英訳に共通して使用されており、こういった背景が日本の研究者の拠所になっているのかもしれない。著者の感覚だと、“prevention of long-term frailty” (長期にわたる要介護状態の防止、長期にわたる虚弱状態の防止) といった英語表記が適切だろう。

https://www.mhlw.go.jp/english/policy/care-welfare/care-welfare-elderly/dl/lcjsj_e.pdf

<https://www.mhlw.go.jp/english/database/db-hss/dl/hs091216d.pdf>

日本高齢者ケアリング研究会の立ち位置

日本高齢者ケアリング研究会は、高齢者の医療、看護、介護福祉、心理、教育に関する学理および実践活動報告を含む実効性の高いケアリング研究についての知識の普及、会員相互および内外の関連学会との連携協力を行うことを目的としている。本研究会のミッシ

ョンの中に「介護予防」という表記は見当たらず、研究会が発行する機関誌の英語表記は、Journal of Gerontological Nursing and Caring Research となっている。なお、この研究会名のより分かりやすい表記法として、Journal of Nursing and Caring Research for Older Adults や Journal of Elderly Care Research and Practice の選択も良いだろう。Older adults を使わず、elderly と表現する研究者が多いが、elderly は becoming old というニュアンスがあり、老いの初期（初老）や高齢者の手前の人を含むため、65 歳以上の高齢者を対象とした研究論文では older adults と表現するのが適切と考える。これは、ISAPA (International Society of Active Aging and Physical Activity) の理事会および JAPA (Journal of Aging and Physical Activity) の編集委員会で議論してコンセンサスを得た内容である。

英語表記から考える「介護と」と「要介護」

「介護」は介護する側の行為であり、「防止」（予防）するのではなく、「洗練・充実」させるものだろう。介護を受ける側にとっては「日常生活機能の維持」が肝要であり、日常生活機能障がいの防止には、体力づくりや運動の実践が極めて効果的だろう。研究者はさまざまな生理的老化に病名を付けたがるが、それはメディカルハラスメントに相当するかもしれない。一般の高齢者が真に求めているのは、自身の生理的老化を自然な変化と受け止めつつ、元気長寿に向かって寄り添ってくれる家族や支援者の存在ではなかろうか？

結 語

介護（＝護りの介入）とは、コメディカルや家族の側にとって、洗練・充実させるものだろう。フレイルティの本人（介護を受ける側）は、要介護化（≡フレイルティの進行）を抑制したいと願うだろう。研究論文では漫然と文字を綴るのではなく、日本語も英語も一つひとつの語彙が持つ意味を熟考して適切な表現を心がけたい。本研究会の会員にとって今後の研鑽の一助となれば幸いである。